



## 自己責任社会

ジャーナリスト安田純平さんのケースについて、みんなはどのように考えているのだろう。私は①国家が国民を守るのは当然である ②混乱している現場の状況を伝えることには大きな意義がある ③安田氏の場合、事前に準備した上での事故である といった点から、自己責任論はナンセンスだと思っているが、そもそもそのような発想が生まれる日本社会とはどのようなものなのか。記事を引用しよう。(朝日DIGITAL 20181120)

### ■「下」たたき、自己愛満たす

和田秀樹さん(精神科医)

厳しく冷たい日本の「自己責任社会」を映すいい例が、アルコールやギャンブルなどの依存症への偏見や、生活保護へのバッシングでしょう。最近、依存症への理解も進んではきましたが、今でもまだ、酒もギャンブルも「意志が弱い人間になるから自己責任だ」という論が、根強く残っています。飲み過ぎる前に酒をやめればいい、借金する前にギャンブルをやめればいい、できないのは本人の責任だというわけです。ですが**依存症は我慢する意志が壊される病気**で、自分の力では何ともなりません。生活保護もリストラやうつ病で余儀なく、というケースのほうが多い。

酒を飲んでも、ギャンブルしても依存症にならない人がある。失業しても生活保護に頼らない人がある。全員ではなく「そうはならない人がある」のだから、「なる人」は自分の責任だという論理があります。その論理が通るのなら、100%全員が死んでしまう毒物だけしか「毒がある」と言えなくなります。

誰でも、人間関係につまづいてうつ病になる可能性がある。単身赴任で、ついアルコール依

存になることだってある。でも今は、自分がそうなるかもしれない、という想像力を欠いた社会です。人間は自己愛を満たしたい生き物ですが、右肩上がりの時代が去った現在は日常の暮らしの豊かさで自己愛を感じにくい。そこで自分より「下」をたたきことでそれを満たし、自分とは関係ない、切り離した問題として考えているのです。

こうした社会では、弱者がより弱者を攻撃し、国家や企業、マスコミといった強者への批判には向かわないのが特徴です。例えば日本で、誰かがアルコール依存症のせいで死んだとき、家族が「テレビで飲酒広告を規制しないからだ」とテレビ局やメーカーの責任を裁判で訴えても世論にたたかれるでしょう。

日本は、飲酒場面の広告をテレビで平気で映している世界でも数少ない国なのに、依存症になった人間だけの責任にされるのです。米国では依存症になる商品を売るメーカーは何か落ち度があれば、訴訟を起こされ、巨額な賠償金を請求されます。

自己責任論には「努力が足りない」という発想がともないます。昔のように「貧乏であること」自体をいじめるのではなく、今は「貧乏なのは努力が足りないから」と決めつける。また今は、幼少時から子供にいかにか教育資金をつぎ込めるかがエリート層になるための重要な要素ですが、私立の進学校に行って一流とされる大学に行き、エリートになった本人は「自分が恵まれていた」とは考えません。逆に非エリートを「努力しなかった本人の責任」と見下しがちです。自己責任という言葉が都合良く使われているのです。